

第四回「家老の日記で学ぶ古文書②―「宇都宮孟綱日記」を題材に―」

○安政七年（一八六〇）三月十七日の日記より

（「宇都宮孟綱日記 八十五」：AS三二二―四五―八五）

【原文】

井伊揚部以柳
多付多
村外松田中つし外
井伊公より人通
をいふもつしし
安ね年市西松はつあ
上杉柳より隣へ主を
いふ所より浪人薩

予亦方及家之浪人薩
那公抑し士を人部合
大人他及根藉井伴云
を短角^角時未^未より
南^南如^如我^我を刺^刺通^通し

方^方より即^即死^死救^救多^多手
負^負も多^多く井^井伴^伴候^候玉^玉
出^出中^中より且^且の^の智^智我^我を刺^刺
出^出出^出存^存名^名名^名と也^也守^守
梅^梅子^子あ代^代未^未中^中より
多^多

【解説文】

井伊掃部頭様

「当時御大老」御登

城掛、外桜田御門之外、

井伊公より見通し

壺式丁も可有之之場

処、松平市正様御門前、

上杉様は御隣也、其処

二て水戸家之浪人・薩

州公様之士壺人都合

廿人程及狼藉井伊公

を短筒二て打、夫より

御駕籠を刀二て刺通し、

双方之即死数多、手

負も多く井伊候玉^(マ)二

御中り、且御駕籠を刺候

故御存命処二も無之

様子前代未聞之珍事

○安政二年（一八五五）十月二日の日記より

〔宇都宮孟綱旅中日記〕：AS二九二（一）

【原文】

一、夜半時、俄、大地震、
能、即、所、高、く、一、白、夢、
中、に、所、有、未、習、者、
此、名、在、中、に、安、切、に、
而、亦、未、志、に、固、者、所、
所、者、自、在、玄、冥、中、に、
此、中、に、有、る、者、最、も、震、
も、在、中、に、

夜、半、時、に、俄、に、大、震、
ハ、才、に、火、の、火、に、
其、中、に、有、る、者、
大、震、

【解説文】

一夜四ツ時過俄二大地震、
能臥居候処ゆへ一向夢
中之様二存候、未曾有之
地震故中々歩行候事も
不相成真之闇二有、漸
房吉同様玄関前江
罷出候、其節は最早震
も相止候、

大地

震之為処々潰屋有之故
か八方之火事火口数十ヶ
処誠驚入候事二候、